

日本漢方協会通信 —① 2024年1月

屠蘇散について

会員 中村成代

「御屠蘇気分」のように、お正月に飲む日本酒のことを「御屠蘇」と呼ぶこともあるが、元来は、複数の生薬を酒に漬け込み無病長寿を願って飲まれていたのが「御屠蘇(延寿屠蘇散)」である。

「御屠蘇」についての文献は、「屠蘇酒」という名称で本草綱目の穀部に記載がある。

本草綱目の記載によると、「小品方には『これは華佗の方で、元旦に飲めば病気や悪い気を避けることが出来る。処方、赤芍、桂心、防風、バツカツ、蜀椒、桔梗、大黃、烏頭、赤小豆を用いて、三角に縫った袋に入れて除夜に井戸に掛け、元旦に取り出して酒の中に入れ煎じて数沸し、一家で東に向かって年の若い者から順に飲み、葉滓はまた井戸に投入する。毎年この水を飲めば一代の間無病である。』とある。また李時珍は『蘇とは鬼の名前で、この薬が鬼を屠割することから名付けた。あるいは屠蘇庵という草庵の名前だともいう』と述べている」

唐の時代に中国から伝えられ、平安時代は貴族の正月儀式として使われていたが、一般の人々に広がったのは江戸時代になってからのことである。

当初の屠蘇酒は、大黃や烏頭など作用の強い生薬が使用されており、江戸時代の有識故実研究者である伊勢貞丈の書である『安斎随筆』にも、「加藤佐渡守の包丁(料理人)が、屠蘇を飲んで、舌が縮み、お腹が激しく痛んで激しく苦しがり、死んでしまった。烏頭が入っていて怖いことだ」とある。

その後、作用の強い生薬は使用されなくなり、その後の屠蘇散は、白朮、桔梗、山椒、防風、桂皮などを主として、陳皮と丁子、細辛と乾姜などが加えられた5~10種の生薬からなっている。白朮、桔梗、山椒、防風、桂皮、陳皮、丁子の7種が配合された屠蘇散などが代表的なものであろうか。

年末になると、薬局のカウンターには屠蘇散が置かれ、また漢方メーカーはお客様サービスとして得意先に配布していた。

通常酒とみりんを合計して約300mlに浸して使い、酒に弱い人は、酒の代わりに水で薄めることもある。三段重ねの盃で、上の盃から順に年の若い者から年長者へと盃を進めていくのが習わしとなっており、若い人の精気を年長者へ渡していくという意味があるようである。

酒やみりんの入った御屠蘇は雑酒という扱いになるため、未成年者飲酒法の対象になり、また車を運転する人は飲酒運転の対象になるので、飲むふりで御屠蘇の雰囲気や留めるなどの配慮が必要になってくる。

また、現在は白朮、防風が食薬区分46通知の「専ら医薬品」に指定されたため、抜かしている屠蘇散や、防風の代わりにハマボウフウで代用している屠蘇散などがある。